デザイン/アフターグロ 口絵・本文イラスト/籠目

ゥ

スケベェが多いんだなあ」などとアホなことを思っていた。 それを、俺は目前の光景から理解していた。 だが今ならわかる。女の子の身体には、男にはない美しさが秘められているのだ。 §羊会型を見るとすっぽんぽんな女性を描いた作品が多く、アホな俺は「絵を描く人はまず思ったのは、どうして女の子の身体ってこんな綺麗なのだろう、ということだ。

11 0

これは、奇妙でいて騒がしく、

けして一級品とは認め難い、

そんな恋の物語である。

11

有り体に言えば、ここからすべてがはじまった。。現実へとめまぐるしく変貌させる。

その情景は、あたりまえと思っていたことを根底からひっくり返し、

あたりまえじゃな

しかし、そこにある感情は罪悪感でも、なにがしかの昂りでもない。いわゆるお着替え中に入室してしまったお約束な状況だ。

強烈な驚きと混乱だった。

ドアノブを握ったまま呆ける俺。

瞳に映るのは同様に呆ける、

半裸の女子。

一点の濁りもない汗を流し、 その花びらを徐々に失いつつある。あふれんばかりの活気を見せる野球部員たちは、 白球を追いかけていた。 空気を読んだか満開を披露した並木の桜

新たな生徒を学び舎に迎え入れた一週間前、春陽の恩恵に目を細め、俺は校舎三階からの

俺は校舎三階からのグランドビューを見下ろす。

「ブラインド閉めればいいじゃん」 「……眩しいな……なんて、眩しいのだろう……」

画面に向いているのだから、 我が妹、芽衣は興味なさそうに「そうじゃないのかー」と呟く。その実、「そうじゃねえよ」 「よそ見もせず、必死でなにかに取り組む人間とは、かくも眩しいものなのか……。 本当に興味がないのだろう。

瞳はパソコン

はその姿が……どうしてか眩しすぎるんだ……」 俺の語りはどこ吹く風と、 芽衣はディスプレイに貼られた付箋をはがしゴミ箱へ放る。

あー野球部ってみんな坊主だからねー」

一仕事終えたようで、

芽衣はため息をつくと、

どうでもよさそうに言った。

「なんなのアレ。甲子園じゃエビバディ坊主エブリディじゃん。そんな規定があるの? 「そういうこと言うんじゃねえよ」 同じ血が通っているとは思いたくない、失敬なやつである。

それとも昔から続けてる手前やめるにやめられなくなった俗習なの? あれ開会式でビッ シリ並んだら大変だよね。ぷよぷよだったら全員跡形もなく消え去るよね」 元るの? あと甲子園を沸かせてプロから引く手数多な選手が万一を考えて大学に入った「それとなんであの人たち負けると勝手に砂持って帰るの? 食べるの? 浴びるの? 「やめろ! 俗習とか言うな!」

したわー』って思うの?」 「頼むからもう謝ってくれ。 全国の野球部員に謝ってくれ」

はいいけどその四年でダメダメになっちゃったら『あー俺、

人生のフィルダースチョイス

売るの?

「あー、あれは卑怯だよ。だってあんな大きな身体の人たちが本気で泣きじゃくってる「とか言っておまえ、毎年甲子園の総集編とか見るとボロボロ泣いてるじゃん」 「ごめんなさい」 芽衣は空に向かって素直に謝ったので、許してやろうと思う。

13 1

んだもん。そら泣いちゃいますわ」

わかる一泣けるよねー。

私野球全然知らないけどー」

```
14
ここで兄妹の会話に女神が舞い降り、不毛な大地に花を咲かせる。
```

「おお、

月本もああいうの見て泣くのか?」

私涙もろいんだよ。特にスポーツ系は、なんでかわからないけど泣けちゃう」

「泣くし、

「なぜ松尾にはがんばっている人たちが眩しく見えるのか。それは、ポンと俺の肩を叩いたのは、一人称の通り近江教諭だった。ただ、近江教諭にはひとつだけわかることがあります」「そうですね。きっとそれがなぜなのかは、おのずとわかってくるよ 。

きっとそれがなぜなのかは、おのずとわかってくるものなのでしょうね。

ないからです」 するりと目をそらすことに成功した松尾こと俺だが、教諭の手から逃れることはできな 松尾ががんばってい

は自分の席に座らされた。 かった。その手は俺のいたいけな肩を決して放そうとはしない。 そのまま引きずられ、俺

目の前にはどっさりと、数式の並べられたプリントの束。

そもそもがんばるってなんですか?」 「……お言葉ですが、おーみきょーゆ。俺はこれでもがんばったんですよ。 「がんばった結果がコレでは、 ばったんですよ。なのにがんばってないというのは、 別の意味で問題ですよ、 松尾」 ちがうんじゃないですか? 俺なりに全力

「抜き打ちだったし、しょうがないよ松尾くん!」 「通っているんだぞ、妹。おまえにも二十六点の血が通っているんだぞ」 「二十六点て……同じ血が通っているとは思いたくないよ、私」

んできた俺の名前が書いてある。

掲げられたのは、本日行われた数学の小テスト、その答案だ。右上には十六年ともに歩

「ちなみにそのクラスメイトは八十二点でしたよ」 「だよな! ほらクラスメイトもこう言ってますよ、 おーみきょ

愛すぎる。 ちらりと月本を見ると、大きな目でぱちんとウインクし、 ぺろっと舌を出していた。 可

ことがあります。なんで俺にだけ、こんなに補習課題よこすんですか!」 「これくらいの点数とってるやつ何人かい 「……わかりましたよ。そうです、 補習プリントの束をびしびしと突くと、無機質な数字の列が波打つ。 俺はひどい点数をとりました。でもひとつ、 るでしょ! なのになんでい 0 b 11 つも俺だけ 解せない

15 1

弁しているというのに、近江教諭は平然と答える。

この際だからと言いたかったことを全部ぶちまけてみた。

しかし、

生徒がこんなにも熱

補習マシマシなんですかっ?」

一二三高校生徒会の副会長が二十六点では、示しがつかないでしょう」

16

さすがの近江教諭。たった一言で俺を黙らせるのだった。 俺がこの私立一二三高等学校の生徒会副会長に就任したのは、 入学した頃は、 まさか自分が学校運営の一端を担うことになるとは思っていなかった。 およそ半年前

しかしなんの因果か二年生となった今、俺は生徒会室の椅子に腰をかけている。

そしてこの部屋にはいつだって、 慣れ親しんだ四つの顔があった。

グの人を選ぶぱっつんへアーも、夢のように似合っている。テストの点数からわかる通り瞳が子犬のように大きく、他のパーツも欠点の見受けられない端正なものだ。黒髪ロン の優等生で、 自虐はただの謙遜だ。

生徒会での役職は書記にあたる。

そんな男受けしそうな要素が詰まっているせいか、尋常じゃなくモテモテである。ただ 彼氏がいないことは断言できる。 本人が言ったわけではないのだが、 口に出さずとも

わかる明らかな要因があるのだ。



冒頭から失礼なことしか口にしないこいつは、松尾芽衣。俺の妹である。尊敬はされなくとも。もう一回言おう。尊敬はされなくとも」 「たしかに尊敬はされなくとも、仲間意識を持ってもらうことは必要かもしれませんね。 学年はひとつ下で、 一週間前入学したばかりだ。ただ同学園の中等部だった去年から生

18

徒会を手伝ってきたこともあり、今では一年生ながらにして会計の座についている。 い人気者である。 鋭い観察眼と調停力、コミュニケーション能力を持ち合わせる才女で、男女学年問わな 二つ結びのおさげでまとめたあどけない容姿も人気に一役買っている。

実際同じ血が通っているとは思えないくらい、できた妹だ。 「せめて平均点くらいはとってほしいものです、 と何度言ってきたことでしょう。 なのに

淡々と辛辣な言葉を投擲してくるのは、近江悠子先生。一二三高校の数学教師で、どうしてその耳にタコはできないのでしょうね、松尾?」 会の顧問でもある。 切れ長な目と、 ハーフアップで整えた髪型から見た目だけならステキな二年目教師だ。 生徒

の男子を除いた生徒たちは、彼女に恐怖すら感じている。 ただこの通り、 俺たちが生徒会役員になったとき、 無駄を省いた正論をそのまま口にする人だ。なので特殊な性癖を持つ一部 同時に近江教諭も顧問に任命された。 困ったことが

親身とは言えないがしっかり手を差し伸べてくれた。そういう意味では良い先生

だと思う。 そして、 ただ俺にだけ如実に厳しいのは理不尽だ。あとなぜか俺だけ呼び捨てだ。 もうひとり。生徒会長というポストにつく人間がいる。

そいつが俺にとって親友であることは事実だ。

しかし同時にやつは、天敵でもある。

「うひゃーすげー。会長さん、「ちなみにですが、同じくクラ どんなところへの嫉妬かと言うと……。 やつへ向ける俺の密かな感情……それは、嫉妬 同じくクラスメイトの会長は満点でしたよ」と、 近江教諭

ついちゃうんだもんなー。で、その会長さんは?」と、 会いに行くことないのにね」と、月本。 「……今、ラブレターをよこした女の子に会いに行ってる。……どうせ振るならわざわざ 先週風邪ひいて休んでましたよね? 芽衣。 それでも授業に追い

こんなところである。 入学した時点では、そこそこ美形の天然パーマ男子という印象でしかなかった。よくよく考えてみれば、やつと俺とではスタートラインがちがっていた。 しかし

会いに行くことないのにね」と、

19 業成績は完璧の一言。またそんな人並みならぬモノを持っているのに一切鼻にかけない、幼少期から日本でいう中学まで、大学教授である親の都合によりロンドンにて生活。学 らかになるやつの経歴に、 周囲は目の色を変えた。

2015/06/15 21:19

気さくな気質。 なにより、ひとたび人前に立てば発揮されるリーダーシップ。

20

こんな人間なのだから、 テストで満点をとるのも、女子からラブレターを渡されるの

そんな逆立ちしても敵わないやつに嫉妬心を抱いてしまうのは、 二年生ながらにして生徒会長として圧倒的支持率を確保するのも当然なのだ。 きっと大嫌いな御都合

すべての笑顔を独り占めする一二三高校生徒会長、その名は――一ノ瀬秋。そうな、近江教諭は他のどの生徒にも見せない信頼しきった、笑みを浮かべた。 まとう俺は、 主義の物語から飛び出してきた主人公のような人間だからだろう。ともすればやつにつき 月本はご主人様の帰りを待っていた犬のような、芽衣は俺には見せたこともない そのとき、 生徒会室の扉が開いた。 サブキャラ『主人公の悪友』といったところだ。

秋は申しわけなさそうにそう言った。

金木犀のように微笑むと、ぱつかれー。ごめん、遅れ

ん、遅れちったな」

「こほん。 あーではみなさま方、本日も短い高校生活のひと時を生徒会業務のために削っ

ていただき、 「うちの兄はほとんど補習してましたけどね」 「自分のために削ったぜ」 秋のふざけるような口調の挨拶に、 ありがとうございます」 生徒会メンバーは耳を傾けていた。

「まあこい 「アレってなんだおい。 「アレってなんだおい。しゃらくさいオブラートを剝がせこの野郎」「まあこいつのアレは今にはじまったことじゃないし」 笑顔でサムズアップする俺にも、秋は淡々と応える。 つの近江先生にいたぶられて悦ぶ性癖は今にはじまったことじゃないし」

「入学式後の雑務も一息ついたところですが、ここから夏の決算にむけて忙しくなると思 誤解だ。俺は一部の男子ではない。「俺の思ってたアレと違う……っ!」

います。

一二三高校のため、

四人で尽力していきましょう。

ということで、

かんぱー

1

「かんぱーい」

21 1 ジュースを手に、ベンチに腰をかけていた。 俺たちが生徒会に就任してから半年、もう何度こんな会が催されただろう。 四つの声と缶がぶつかる音が、夕刻の公園に響く。 生徒会業務を終えた俺たち四人は缶

時に仕事の大変さで疲れきった心を癒し合い、

時に行事を終えたことによる充実感に浸

22 本日は入学式を終えてのお疲れさま会という名目で、月本が企画した。り合ったこの公園は、俺たちの思い出の一ページに内定していた。 「で、秋? 「ええっ! ずいっと月本が詰め寄ると、 。俺にはその慎ましいお腹の底にある彼女の思惑が、 いきなりかよ、紗姫!」ラブレターの件はどうなったの?」 秋は一瞬にして冷や汗を湧き立たせた。 しっかり予想できている

だったね。場所は理科棟の踊り場で……『今は生徒会長としてやらなきゃいけないことが いっぱいあるから、付き合ったら寂しい思いをさせる』……的な?」 \J. 「めっちゃ聞いてくるやん……。まあ、まだ中学生っぽさが残ってるけど普通に可愛い子 「どんな子だったの? 断ったよ……」 どんなシチュで? なんて言って断ったの?」

今ここで見せてよ」 「もういっそここで再現して。芽衣ちゃんを相手に」「ええっ?」なにその要求っ?」 「ええっ? 「うーん……情景が浮かんでこないなー……秋、 なんかこっ恥ずかしいこと言わされてるな……素直に答えるのもどうなんだ、 それでも月本は満足できていないらしい。 なにその要求っ? そのときどんな顔してたの? ちょっと

くらい真剣なものだった。 「なぜ私なのだろう」 「やってたまるかそんなことっ!」 顔を真っ赤にして拒否する秋。しかし月本は冗談を言っているようには見えない。 つまるところこうして秋を質問攻めするため、月本はこの会を企画したのだ。なぜそん

ら、間違いない。他のだれにも聞かせない甘い声や無駄に多いボディータッチなど、秋に確証はない。が、ここ半年でだれよりもともに過ごしてきた俺や芽衣が判断したのだか なことをするのか、そんなのは火を見るよりも明らかだ。 月本は、秋のことが好きなのだ。

23 1 えば、 はぐらかしてきた。 ず、一度として彼女を作 対する言動行動を見れば一目瞭然だ。 ^、一度として彼女を作ったことがないのだ。その理由を聞いても、秋は恥ずかしそうにまたそれは月本に限った話ではない。秋は今まで幾多の告白を受けてきたにもかかわら しかし、秋はそんな月本のアピールに、 成績優秀で品行方正、 月本の気持ちに気づいているかさえ怪しい。 希代の統率力を持つ秋だが、 一度たりとも応えたことはなかった。 俺にとっては気兼ねなく、 互いを理 もっと言

解し合っている親友だ。

2015/06/15 21:19

24 距離感が、なによりも、苦しいほどに、妬ましいということだった。そうした中でひとつ問題があるとすれば――俺には秋と月本の間に そうした中でひとつ問題があるとすれば――俺には秋と月本の間に漂うその奥ゆかしいだがただひとつ、彼の恋愛観だけは、俺にはまったくわからなかった。

「ん?」なんか言ったか、紗姫」「……なんで振る相手にも優しくしちゃうの……それじゃ諦めてくれないじゃん……」

都合良く聞こえなくなっちゃうやつだよ……生で初めて見たぜ……」 「っっなんでもない!」 おおお……み、 見た今の……っ! リアルガチのフラグクラッシュだよお…

興奮気味で俺に耳打ちする妹の思考も、

俺にはまったくわからなかった。

『少なくとも恋愛は、チャンスではないと思う。 こんな金言がある。 私はそれを意思だと思う』

この言葉にもっと早く出会えていれば。そんなたらればを想像してしまうほど、

俺は未熟だった。

答めるべきは、 スイッチひとつで開始する、 この世にはびこるハッピーでマーベラスなラブストーリーにある。 たかだか赤と青と緑の三原色によって繰り広げられる物語

そんなステキなストーリーを目の当たりにした純真な少年は、の登場人物たちは、いつだって魅力的な異性と結ばれる。 「ボクも大人になれば、こんな恋愛ができるんだ!」 彼らが結ばれたのは、運命ではなく段取りであることを。 残忍かつ悪質であり情状酌量の余地もない、『フィクション』という言葉の存在を。 少年はまだ知らない。 きっとこう思うだろう。

窓の王女様を待ち続けた。 何物にも染まっていない少年だった俺はそんなまやかしを信じ、 清楚で可憐で色白で黒髪でほどよくおっぱいがあっていじらしまいます。 白馬の王子様ならぬ深

子曰く、ただしイケメンに限るのである。あたりまえだ。いつの世も、世界の真理が やべえ俺イケメンじゃなかった! いつの世も、世界の真理がそれを妨げるのだ。 と気づいた時にはもう遅かった。

少女は現れない。 しかし待てど暮らせど、

と優しくしただけで、 そして俺は、 甘い幻想から目を覚ました。しょせんフィクションは作者の願望。 コロッと好きになってくれる女子などいないのだ。

25 1

俺は冒頭の格言を心に刻み、

人生の最優先行動原理を恋とした。

恋をこの手で摑むため

やつはあたりまえのようにモテまくる。 そこで出会ってしまったのが、秋だった。『意思ある行動』に身を賭すことを誓い、この高校に入学した。 息を吸うようにモテまくる。 モテすぎて、

26

るという現象がどんなものかわからなくなるほど、モテる。

生まれたときから決まっていた、敵う相手じゃなかったのだ。 でもだからこそ……どうしようもなく俺は

と振られている、 苦痛の叫びが俺の部屋に響く。俺は歯を食いしばり、「ッッッ悔しいですッ!」 かろうじて反応しているのは、 しかし妹は、そんな兄の姿には一切目もくれず、無言で本棚の漫画を漁っていた。 右手。 「はいはいそうだねー」とでも言わんばかりにひらひら 涙を流す寸前だ。

俺が怪我でもすれば上目遣いで心配してくれ

だろう、 た、古の妹。だが今、俺を心配しているのは、右手だけ。いつでも後ろをトコトコついてまわり、俺が怪我でも たった一つしかちがわない俺たち兄妹、 妹は人気者ヒロイン。 かたやお兄ちゃんは、ただのサブキャラ。 いつでも支え合って生きてきた。 でもいつから

芽衣よ。おまえもいつか秋に攻略されてしまうのだろうか。 たった一人の妹さ

え、友達の妹枠として奪われてしまうのだろうか。 でも……でもきっと右手だけは……芽衣の右手だけは、 いつまでも俺を愛してくれる。

一うおおっ、 「おおお芽衣の右手ーっ! やめろアホ兄! 俺にはもうおまえだけだ芽衣の右手ーっ-気色悪いわ!」

そう信じても、

いよね……?

ていると、今度は左手が飛んできた。 「なら右手で叩きのめしてやんよ」 「ぐはあ! め、芽衣の左手ぇ! 俺と右手との愛を邪魔するなっ!」 芽衣の右手に擦り寄っていると、芽衣本体から罵声が飛んできた。それでもしがみつい ついには芽衣の右手が俺の頭をひっぱたきはじめた。

そう言うと、

俺はしゃがみこみ、

悲痛の声を上げる。 「うっさい!」 「うおお芽衣の右手ぇ! 結局俺は、芽衣の右手の愛すら手に入れることはできなかった。芽衣の右手に飛びかかるも、直後カウンターの一発を浴び、俺は 思い出せ! リメンバーリメンバーッ!」お、おまえまで俺をいたぶろうというのか! 正気に戻れ芽衣

俺は膝から崩れ落ちた。

27 1

B A D E N D

「ねえ、

ふざけてないでさっさとはじめよ」

「えーっとたしか今日買ってきたやつが……ああ、カバンの中だ」 素直に起き上がり、床に座る。芽衣も定位置である俺のベッドに腰をかけた。

ンの中をまさぐっていると、その様子を前に芽衣はニコニコと満面の笑みだ。

なんだろうね、私の右手!」

「お、

あったあった。

今日のお菓子はなんだろなーっ!

右手へ上機嫌に話しかける芽衣。手と会話するとかこいつ……引くわ。

はい、今日のお茶請けでーす」

コンビニで買ったチョコクッキーをテーブルに置くと、芽衣は目を輝かせた。

これCMでやってる新商品じゃん! 食べたかったんだよねー

カバ

「おお!

御眼鏡に適ったようでなによりだ。

んぐんぐ。はーい」

もう食ってるっ?

松尾兄妹定例会議。それは俺たち兄妹の兄妹による兄妹のための会議だ。

場所は俺の部屋、集合時間は夕飯後、風呂上がりと決まっている。そのため、 回から一年が経とうとしているこの会は、いつの間にか週二回の定例と化していた。

今日も風呂

上がりでそのまま部屋に入ってきた芽衣は、パジャマ姿でホコホコとしていた。

俺だってがんばってるじゃん! うえーんっ!」 「なんで秋ばっかりラブレターもらうんだよっ! 俺にも一通くでそしてなにより気になるであろうこの会議の意図、それは……。 俺にも一通くらいあってい いじゃ

は入学したばっかの新入生でしょ? 「あーはいはいそうだねー。 しかしすごいね秋さん。これで通算何通目だ? 悔しい、悔しいよ芽衣!」ょ? いやーすごい」

「はいはい、 「ぐうう! 悔しいねー くそう秋めーっ!

「そんでチミも変わらないねー。一年近く愚痴り続けてまだ嘆くか」 つまりは秋への愚痴である。どちらかといえば俺のための会議だということは内緒だ。 こうでもしないと精神が保てないんだい!」

見ている俺には必要なのだ。だってあいつホントモッテモテですのよ? して告白とかされちゃうのよ? 「うるせいやい! これ が情けない行為だとはわかっている。それでも秋のラブコメのような日常を間近で 俺の存在スルー

29

「まったく……こうして妹が献身的にカウンセリングしているのに、

少しは成長できない

30 ものか。 「そうか、これはカウンセリングだったのか。 兄にはおまえがお菓子に釣られ、ただただ

俺の愚痴を聞き流しているだけの妹にしか見えないけどな」 芽衣は幸せそうにクッキーをほおばっていた。「そんなことないよ。いやしかしおいしいねこれ いやしかしおいしいねこれ。また買ってきてね、ブラザー」

クッキーモンスター に聞く耳持たずクッキーを食い続けるおまえには、 どうでもいいけどおまえってコミュ力高いことで有名なんじゃなかったっけ? ・にしか見えない んだけど。 一片もそんな要素見えないんだけど。 兄の話

か? 「はい出ました。そーゆーところがブラザーのモテないところ。女子に対して体型の話な 「あーもう食ベカスボロボロ落とすなよ……。 デブっちゃうぞ?」 てか女子が夜中にそんなもん食っていいの

んて、 「秋さんなら、『君のそのおいしそうこ食べこら・・・・・ゞ「ヹヹヹ゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゙゚゚しながら食べる手を止めない芽衣。うーん……説得力が見当たらないそう言いながら食べる手を止めない芽衣。うーん……説得力が見当たらない 言語道断だよ。デリカシーがないんだデリカシーが」

が様になってるの。それが、 「それが秋さんには言えるんだよ。 「そんな恥ずかしいこと言えるかよ……」 秋さんの百八つあるモテ要素の一つ」 そんでもって微塵もいやらしく聞こえないの。セリフ くらいは言うよ?」



32

きっと俺が同じセリフを言ったら拳が飛んでくるにちがいない。たしかに秋にはいちいち嫌味がないから、どんなセリフでもさらっと耳に入ってくる。この妹、ただのクッキーモンスターかと思えば、的を射たことを言うではないか。 「君のその バキッ。 ほらね。 おいしそうに食べてるとこが可愛いぜ」

モテ男スキルがある主人公キャラに、悪友キャラは太刀打ちできないの」 「つまりユー がいくら対抗心燃やしたところで、秋さんには勝てないの。 そういう天性の

「ぐぐ……だが、負けっぱなしではないぞ! 俺にも秋に勝っているところはある!」

タスとしては十分だろう。 俺が百七十後半なのに対し、 5、秋は百六十半ばと平均的に見れば低い。俺のほうが大きいぞ!」 身長は男のステー

「例えば……そう、身長!

「へえー。たとえば?」

「たしかにそうだけどさ。秋さんは色白で童顔 で中性的で、 つまり身長に見合った美少年

だから身長の低さも武器だったりするんだよねー」

「うぐう……し、身体能力だって俺のほうが高いぞ! それにあいつカナヅチらしいぜー

まあ俺はギュンギュン泳いじゃうけどねっ?」

「それでも運動神経悪いわけじゃないじゃん、

秋さん。

欠点だとしても、他で十分補って

るし。 「ぐはあっ! この妹、加減を知らない……精神を破壊しにかかっていやがる……。 逆に言えばユーなんて取り柄それくらいでしょ」

「そうだ、ツッコミスキル! なにか他にないか、秋に勝てそうなところ……。 ツッコミスキルは俺のほうが高いぞ! 13 いじゃない

ツッコミスキル! 古今東西主人公と言えばツッコミの名手が多い。そしてクラスや生徒会では秋よりも俺 主人公っぽいじゃないか! やったぜー

と、浮かれていたが、なにやら芽衣が俺を憐れんだ目で見ていた。のほうがツッコミとしての地位を確立しているんだぜ!「やったぜ」

「あまり言いたくないんだけどさ……ツッコミスキルが高いのって、秋さんを含めたみん

「いやあああああああっ!」 ブキャラだったのか……せめてボケタイプでいたかった……。結果、今日一番のクリーンヒットが炸裂したのだった。そうか、 俺は ッ ッコミ特化型の

なタイプのサブキャラ……」

なからいじられてるからでしょ? それはいわゆる、

周りのボケに振り回される一番不遇

33 1 「……あぁそうだよ……しょせんどうあがいても、 ……あぁそうだよ……しょせんどうあがいても、俺は主人公にはなれないんだ……すぐわかりたくないことをわからせられた俺は、遠い目で窓の外を眺める。

34

えかっ!」
もかませて、人を惹きつける才能がある……考えれば考えるほど、典型的な主人公じゃっもかませて、人を惹きつける才能がある……考えれば考えるほど、典型的な主人公じゃっ子からは潤んだ目で見られる。お人好しで、ガキっぽいようで頼りになって、小粋なボケーをある。男子からは一目置かれ、女 芽衣がそんな俺を見て、「ああ、スイッチ入っちゃった」と面倒くさそうに呟く。近くに最強の主人公がいるのだからな……」 はファーストネームだ! 言ってみろ妹、俺の名前を言ってみろ!」 俺は自虐をやめない。俺が泣くまで自虐をやめない。 かっちょい 「極めつけは名前だよ! 「はいはい落ち着いて……」 ーっ! それに比べてなんだ、俺の名前は! に比べてなんだ、俺の名前は! 『松尾』はまだいいわ……なんだ『一ノ瀬秋』って……主人公過ぎるだろっ! かー

落語家か? 「そうだよ『家之助』だよっ、松尾家之助だよっ! 俺の、 そこで芽衣は、 家之助……」 一般家庭の生まれですけどっ? 同情めいた苦笑いを見せる。 そんで妹は そして目を逸らしながら呟いた。 落語家か? 『芽衣』 だよ! わしゃ生まれた時から 普通だよ普通

なのになんだ、家之助って!」

てるんだ! り早く収束させることにしたらしい。 「そうさ! 俺なんて生まれたときから出落ちなのさ! やはないでしょ。むしろ秋さんほど家兄を認めてる人いないよ?」名前だけじゃなく俺という人間そのものをバカにしているんだ!」 どうやら徹底的に落として手っ取 きっと秋はそんな俺をバカにし

読む妹。 でもさ、 うえーんっとベッドを叩いて騒ぐ俺と、ベッドの上で揺れながら菓子を口にし、 芽衣は漫画に目を向けたまま、つるっとこんなことを言う。 結果として定例会議はいつも通りの展開へと収束したのだった。 別に家兄はモテたいってわけじゃないでしょ?」

「聞いてねえし……」

「ちくしょーバカにしてーっ!

秋のバカバカ

!

それはないでしょ。

35 1 「ここぞとばかりにセクハラするんじゃないよ去勢すんぞ」 「いやモテたいのよ家兄は。 知ってるだろ?」 だって男の子だもん。 知ってるだろ? おちんちんつ

意図のわからない質問に、

「ふへ?」と変な息が漏れる。

「許してほしい

しょ、って言ってんの

「よし。で、そうじゃなくてさ、家兄は不特定多数の女子からモテたいわけじゃないんで

36

かっかっか、 かっか、と高らかに笑う芽衣の姿は、どう見てもバカにしているそれであった。ご所望の特定女子は秋されに熱視線だから、どちらにせよ難しいけどねー」

「かーはははー……って、うおうっ! だがしかし……図星の矢が突き刺さった俺に、反論の余裕はなかった。 ううつ……ぐす」

楽しそうに笑っていた芽衣だったが、俺の現状を見て仰天する。それもそのはず妹の目 ガチ泣きしてるっっ?」

まるで乙女のように枕を抱きしめながらむせび泣い

いていた。

に映る兄は今、

「ひいー……ごめんー、ごめんよー」

情けなく落涙する俺に大慌てな芽衣。なんだかそんな風景すら胸を苦しめる

「言っちゃったよ……」 「……な、なんで月本は秋なんかが好きなんだよ―――っっ-結果俺は妹の前で、心にある醜い感情を吐き出してしまう。 つつ!

紛れもなく俺は、 言ってしまった。 月本紗姫が好きなのだ。言ってしまったのである。 胸に秘めた、 本当の想い。

なのにその出会いは、『一目惚れ』という絶妙にロマンチックで都合の良い言葉によっ深窓の王女様だった、なんてのは往々にしてあることだ。 なった女の子が、 った女の子が、清楚で可憐で色白で黒髪でほどよくおっぱいがあっていじら大層なきっかけはない。恋愛を第一に考えようと決めた入学式の日、偶然に しいまさに

偶然にも隣の席に

俺を束縛していった。

『意思ある行動』を、一心不乱に繰り返してきた。 あたりまえのように、 俺は月本を目で追っていた。 話しかける機会をうかがっていた。

一ノ瀬秋は出会ったときすでに、俺の敵だった。それは俺にとって、親友と呼ぶべき男だった。 俺が彼女に恋したように、彼女もとある男に恋していた。 しかしその中で、俺はやんわり気づくことになる。

俺の敵だったのだ。

だが、

諦めることは

できなかった。俺の中の『意思』が、 敵はザ・ラブコメの主人公。勝敗は決まっているのかもしれない。 諦めさせてくれなかった。

そうしてなにも進歩しないまま、 すると芽衣が、 いやー……しかし、 なにか含みを持たせた渋い表情で呟く 紗姫さんかあー……」 一年が過ぎてしまったわけだ。

37 1

38 「いや、うん。それもそうだけどさ……紗姫さんが彼女ってのも、むずかしい「そりゃわかってるわい!」なんたってライバルがあの秋さんですからね!」 むずかしいと思うよ?

芽衣のこの発言に、俺はカチンときた。そりゃそうだろう、なんていうか……扱いが……」 一年も恋している女の子

女みたいに……いつからそんな冷たい子になったんだ?」 「いや厄介というか……純粋なのはたしかだけどさ……ん」 「おう妹、 まるで面倒くさい女のように言われたのだから。 おまえなんてひどいこと言うんだ。あんな純粋な子を捕まえて、 -、まあどうでもいいか。 まるで厄介な

どうせ実らないし」

「てめえ……なんだよ、

。なにが不満だって言うんだ!」

的に見て、 したほうが良いよって諭してるの」 「不満なんてないよ。家兄がどうなったってわりと本気で知ったこっちゃない。ただ客観 家兄は秋さんに圧倒的に劣ってて勝ち目ないんだから、 おとなしく別の相手探

「うるせえ! 俺のどこが秋に劣ってると言うのか! 生活態度、カリスマ性、器、顔、 家事能力、器用さ、 具体的に言ってみろ! 好感度、女の子の扱

「もうやめておねがい! 社会的地位、 これ以上は命にかかわる! 顔……」 あと今『顔』って二回言ったよー

俺が主人公だったなら……自称どこにでもいる普通の高校生で『やれやれ』 って

うたびに友達が減る、まごうことない普通の高校生なのが関の山だけどね」 口癖の似合う先祖がなんかすごい系の男の子だったら……」 「まあ家兄が主人公だったところで、どうせ先祖はただの公務員で、『やれやれ』 「だれがおねえちゃんか」 「やかましい! 芽衣のバカ! 「おねえちゃん!」 もう知らない!」

父親に注意されるまで、

続くのだった。

どう見ても不毛でしかない定例会議は、

単身赴任で家を空けることが多いわけでもない

こういうことするのどう思う? 「あっ、秋! 「大あくびだなー紗姫」 移動教室で廊下を行く道すがら、 はふう……」 yるのどう思う? 松尾くん」 女の子のあくびしてるところガン見しちゃだめなんだよ!

39

いじらしいあくびが隣から聞こえてきた。

すまんすまん。 でも紗姫が眠たそうなのなんてしょっちゅうだろ?」(きゃ)、そういうのいけないんだぞ!」

40

なっちゃって、五時間も寝れてないー」 のには、ちゃんと理由がある。 「豆腐屋の娘だからねー。今日も五時起きですよー。しかも昨日本読んでたら寝るの遅く うあー、と腕を上げて伸びをする月本。「そうだけどー、はーっ、ねむーいっ!」 真面目な彼女がしょっちゅう眠そうにしている

うのは、全国的な常識だろう。こんな華麗な外見なのに実家は庶民派なところも、 プがあって好感が持てる。 「でも豆腐屋だからって、娘まで早起きすることはないんじゃないのか?」 くつは、全国的な常哉だろう。こんな華麗な外見なのに実家は庶民派なところも、ギャッ最寄り駅は俺と二駅隣なので実際に行ったことはない。ただ豆腐屋と言えば早起きとい

そう、

月本は豆腐屋の娘さんなのだ。

「それはー……やっぱ家族だし、時間を共有したいなーって。 秋のこんな問いに、月本は恥ずかしいのか口ごもりながら答える。 どっちにしろお父さんとお

母さんが起きると、 うちの芽衣なんてたとえ天変地異が起きても、いると、気配で起きちゃうしね」

自分のタイミングで目覚めな

きゃ気が済まないタイプだぞ」

一度起こしにいった際、布団から覗いていた眼光は凶暴な肉食獣のそれだったからな。 たしかに芽衣ちゃんは寝起き機嫌悪い系女子って感じだな」

アレ以来、朝に妹の部屋へ入ることにトラウマを抱いている兄である。 いいなー月本は。 いやいや全然! 全然ツヤツヤじゃないよ、 毎日うまい豆腐が食えて。 だからそんな肌ツヤツヤなんだろうな」 もうガサガサだよ!」

「そんなことないよ! 「いやどこがだよ紗姫。 やいや……君がブスなら世界の九割五分がブスになるぞ。 私ブスだし!」 キレーな肌じゃん」 謙遜したがりだなあ。

て相変わらず女子に『キレー』とかさらりと口にできる秋よ。 「まー、もう慣れたよ。 「秋はどうなの? 一人暮らしで……朝起きるの大変でしょ?」 教室に着いても三人の会話は続く。今度は秋の話だ。 一人で全部やらなきゃい けないって考えると、意外と結構できる

もんだよ。料理も上達してきたし」 「おまえの弁当めっちゃうまいもんなー。最初の頃は見るに耐えない出来だったのに ホント、尊敬しちゃうよー。私はあんまり料理うまくないから」

「ここまで来るのに苦労したよ。最近じゃキッチンに立つのがちょっと楽しみになってる

ブオイルに漬け込まれているハーブ豚が……」

41 1

今も冷蔵庫には、

オリー

恐るべき完璧系主人公気質である。 苦手も持ち前の努力と思っていない努力で打ち破り、あげく楽しみにまでしてしまう、

42 どん憔 悴していったよ」 秋は優しく笑うと、月本も顔をほんのり赤らめ、「ああ、今度からそうするかもな」 「もーこわいこわい。気をつけてよー秋。 「でもさすがに風邪ひいたときはキツかったなー。気だるいのと食欲ないのでもう、 連絡くれれば看病しに行ったのにー」 目をそらしながらも微笑む。

俺はそれを、

ただただ眺めていた。

を崩さずにいるのがやっとである。 秋を見つめる月本の横顔を、 言い方は悪いが、俺は月本が振られるのを待つというスタンスに甘んじている。 その度に俺の中で蓄積していく、 こうして三人でおしゃべりして、 ひとえに、これが俺たち三人の日常だ。 ,今はただただ見つめるしかないのだ。 放課後は生徒会室にて芽衣も加わりわいわい楽しむ。 切ない感情。 月本の秋へのアピールを前に、 俺は表情

これまで何人もの男に告白されてきた月本。中には校内一のイケメンと名高い人もい なぜなら月本は、 究極に一途なのだから。

が破れることを、卑怯にも祈るしかなかった。しかして俺は、早々に秋と月本の微妙な関係に決着がつき、 かは理解不能だが、 ひとつ幸いなのは、秋にその気はないということだ。秋がなぜ彼女を作ろうとしない だって月本は、 俺なんか目にも留めていないのだから。 俺にとってそれは大いなる希望だった。 願わくば大好きな彼女の恋

るのは至難の業だ。

それだけ一直線な彼女を、

た。だがその度に月本は「好きな人がいる」と断り続けてきたらしい。

たかだか同じクラス同じ生徒会というだけの俺が振り向かせ

そしてその日も、 『意思』を持った停滞に身を委ねることになると-そう思っていた。 後を追う

43 1 ように教室を出た。 「うお!」「きゃっ!」 そこで俺は、同じく角を曲がろうとしていた一人の女の子とぶつかってしまった。 放課後、掃除当番だった俺は生徒会室に向かう秋と月本を見送った十五分後、 互.

に驚きの声を上げ、相手の顔をうかがう。

言葉を区切る。そして……。 「いえ、大丈夫です。私のほうも……」 「ご、ごめん、ちょっとよそ見してた」 -.....ぐす」 ふと、うちの妹と同じ色のネクタイをした一年生女子は、 なぜか不可解なタイミングで

44

の子が、状況を把握して慌ててフォローする。 「え、ええっ! そんな強くぶつかったわけじゃないのだが……と思っていたが、 突然目を潤ませる彼女に、俺は泡を食った。 ご、ごめん! どこか痛めちゃったっ?」 彼女の友達と思しき女

出しちゃったみたいで……」 「あああっ、ちがいます、大丈夫です! たぶんこの子、 副会長の顔見て昨日のこと思い

はやんわりと真実を導き出した。 「昨日のこと? 涙する一年生女子・副会長という俺への呼び方・昨日のこと、という手がかりから、俺 昨日のラブレターの……?」 ……って、 ああ……」

「わっ、

よくわかりましたね」

「今までも何回かこんなことあったからね……

俺の発言に、慰めている子は「なるほど……」と笑った。

しかしよく見ればラブレターの子……本当に可愛いじゃないの。こんな子を振ったの

すことないよ。 「うう……ありがとう、 9ことないよ。別にあいつも、君に魅力がないから断ったわけじゃないからさ」「えと……なんていうか、気にするなっていうのは無理だろうけど……そこまで気を落と ございますう……」

か、あいつは。罪な野郎だよ。

ラブレターの子はハンカチで口を覆いながら答えた。 やそれにしても……泣くほどなのか? 入学したての一年生女子って聞いてたから、

そこまで本気じゃないもんだと思い込んでいたけど……。 ここでタイミング良く、俺の疑問をもう一人の子が解決してくれた。

「私たちエスカレーター組で、 この子中等部の頃からずっと会長に憧れてたんですよ」

45 1 そういや去年、秋が一度だけ遅刻してきたことがあったな。めずらしいとは思っていたたんです……。それが原因で遅刻になっちゃったのに、『いいよ』って言ってくれて……」 うになってたとき……一ノ瀬さんが声をかけてくれて、自転車屋さんまで連れてってくれ「……中等部の頃……登校中に自転車がパンクしちゃって……どうしようもなくて泣きそ付け加えるように、ラブレターの子が涙声で教えてくれた。 「あ、そうなんだ」 そういや去年、

子振るなよ、とか単純に羨ましい、とかそういうものに似てるけど、少しちがう。なんだろう。このとき俺は、よくわからない感覚に苛まれていた。こんな可愛/ が、そんな裏があったとは。そりゃそんな出会い方したら惚れてまうわな。 こんな可愛くて良い

46

「でも……好きな人がいるのなら……仕方ないですよね」 ただの嫉妬よりも、どこか温かな感情。そんなものが、胸に渦巻いていた。

「え? ラブレターの子はそう言って苦しそうに笑う。その言葉に、 好きな人?」 俺は違和感を覚えた。

ちゃったんです」 ば、 はい……昨日振られた直後……ちょっと興奮しちゃって、しつこくその理由を聞い

は、好きな人がいるんだ』って……。もしかしたら、私を納得させるためのウソだったの 「そしたら」ノ瀬さん、すごーく悩んだ末に……恥ずかしそうに言ってました。『*彼女はもじもじしながら頭をかく。あらこんな大人しそう子が……恋ってすごいね。

かもしれませんけど……」 だから多分…

そう言う俺の口調は、 あいつはその場しのぎのウソとかつくやつじゃない。 自分でもわかるほど動揺していた。

その後一言二言交わし、

一年生女子二人組とは別れた。

改めて生徒会室へ向かう中で、俺は悶々と考えていた。 あいつと出会ってもう一年が経つ。本音を言い合える仲ではあると思う。 思わぬところで小さな秘密を知ってしまった。

親友としては、ちょっちショック。 秋の好きな人というのは、 ひとつ確実なのは、秋のその恋は、俺にすら言わないほど大切なものだということだ。少なくとも、あいつがだれかを好きになったなんて聞いたこともない。 万が一それが、月本であったなら……っ! しかし、しかしだ。そんなことよりも気になることがある。 一体だれなのか。

47 1 ヤさせながら作業をしていた。芽衣には俺の異変が見てとれたようで、時たま『なんだこまさか月本のいるところでその本意を聞き出すわけにもいかず、生徒会では心をモヤモ そんなこんなで本日のノルマが解消され、 つ』といった視線をぶつけてきた。 れなく芽吹いた不安の種に、 俺はひとり戦慄くのだった。 生徒会室はお開きムードになる

そこで月本はこんな提案をする。

48 まで俺と体育教師の三人で体育倉庫の整理をしていたからだ。 体操服姿の秋は申しわけなさそうに手を合わせる。なぜ体操服なのかというと、り返しておきたくて」 食べたい、クレープ。どう、 「あーごめん、今日は俺ちょっと残っていこうと思ってたんだ。 「ねえねえ、 今日はいつもよりも早く終わったからさ、寄り道して行かない? みんな」 先週風邪で休んだ分を取 先ほど ーププ

「ふぐー……」 「家兄は近江先生と補習課題の答え合わせでしょ」「あっ、俺は行け……」 ああ……せっかくの月本のお誘いが……。 クレープ」 しかも秋のいないチャンスだったのに。

「あっ、

「いえーい」 「もーしょうがないなー男子たちは。じゃ、 「あ、ちなみにあたいは行けますぜ、 ただ月本の秋を見る目は、 その後女子たちは、二人でキャッキャウフフと生徒会室を後にした。 やっぱりどこかさみしそうだったとさ。 今日は芽衣ちゃんと放課後デート

|.....さて、 生徒会室が野郎のみになったので、 んじゃ俺もおーみきょーゆのところ行ってそのまま帰るわ」 俺は心置きなく制服に着替え、秋に別れを告げる。

たか結局踏み込めなかった。 この場で秋の『好きな人がいる』発言の真意を確かめようかとも思ったが、 恐れをなし

「うはーよかったーっ!」 職員室、整頓された近江教諭のデスクにて俺は安堵する。 「はこれでいいでしょう」 だが隣に座る近江教諭は、

「できれば一ノ瀬くん成分を除いた、松尾純度百%な答案が見たいのですけど」習プリントをじいっと睨みながら、付け加える。 「うひーさすがおーみ女史……ぬるっとお見通しですね」

のことですから、一問一問しっかり理解させているのでしょうけど」 これ見よがしに苦い溜め息をつく近江教諭であった。「ご名答。俺は良き家庭教師を持ったものです」 「あなたに課題が出るたび手伝わされる一ノ瀬くんの気持ちにもなってください。

49 な……ああ、そうね。 「さっき来たみたいですよ、 しかし美人さんはなにをしても様になるものだ。そういや俺の周りって結構美人多い かに絶望する俺に、近江教諭は別の話題を持ちかける。 俺の周りじゃなくて、 秋の周りなのね。

50

警備員用男子更衣室とか

「あとサーバー室とか」 「俺の思ってた妙なところとちがう……っ!」

「そうでしょうね」

「その部屋で良からぬことできるスキルはないですけどね」

「妙なところって……どこですか?」

の部屋でも開けられるからといって、

妙なところへ忍び込んではいけませんよ」

いくらど

「だから今はマスターキーで開閉しているのです。わかっていると思いますが、

こういう普段くそ真面目な人がオノマトペを口にすると可愛いよね。それだけ。

「先日折れてしまったのですよ、検収室の鍵。ペキンと」 ええもちろんですけど……これ、

『マスターキー』

って書いてますよ?」

「これで開けてください。場所はわかりますよね?」

「皮肉を口にしながら、近江教諭は俺に鍵を手渡した。」皮肉を口にしながら、近江教諭は俺に鍵を手渡した。「そのやる気を勉強のほうに向けてくれれば、私は嬉しいのですけれど」

「おーけーです!

今すぐ持ってきますよ!」 五時三十分を示す。

下校時間までは余裕がある。

別に明日でも 検収室から

ここまで持ってきていただけませんか? 長三十センチほどのミニサイズだが。 いいのですけれど」 ここまで持ってきていただけませんか? こちらでも事務処理があるので。別「今は事務の検収室に置いてあるみたいです。そこでお願いなのですけれど、 壁の時計を見ると、 このたび生徒会は勤労をたたえられ、

「えっ、

本当ですかっ?」

その報告に、俺はうわずった声を上げてしまう。

冷蔵庫を買っていただけることになったのだ。

全

5

51 1

時間を確認しようとポケットに手を突っ込むも、

携帯はない。

「って、

おろ?」

俺が生徒会室を出てからまだそんなに経っていないと思うけど:

曇りガラスから見える生徒会室の中は真っ暗だった。

いた分を取り戻したなら、

一緒に帰ろうと思ったからだ。

生徒会室の様子を見に行くことにした。

秋が思う存分風邪ひ

検収室へ向かう道すがら、

相変わらずよくわからない近江教諭であった。

一 え?

あいつもう帰ったのか?」

生徒会室は予想外の様相を呈していた。

だが

52 なんだろうね、 ただそのありかは容易に断定できた。 瞬間、底はかとない不安感に襲われる。 あれ。 携帯なくしたことに気づいたときの恐怖感って

した記憶があるのは、 に置きっぱなしだが、 置きっぱなしだが、カバンにスマホを入れる習慣はない。なにより最後にスマホを操作職員室、まして近江教諭の前でスマホを取り出すことなどありえない。カバンは職員室 生徒会室だ。

都合良く目の前には生徒会室。幸運にも今俺の手にあるのはマスター

牛

どうやら本

日はラッキーデー

のようだ。

照明スイッチの感触を捉え、

マスターキーを鍵穴に突き刺

灯をつけた。

秋が、 女だった。

解決しゴールインが考えうる理想的なルートだ。 秋はハーフパンツを穿いたまま、上半身はほほ裸だった。真っ白な胸元は、なぜならお着替え中の女子は、親友の顔をしていたからだ。 『キャーマツオクンノエッチー』から長いドギマギタイム経由の、彼女の抱える問題をたとえば女子がお着替え中の部屋に誤って入ってしまったことを想定するなら、その後 から長いドギマギタイム経由の、 包帯のよう

大声を上げるような事態には至らず、 「万一を考えて来てみれば、まさか万一が巻き起こっていようとは思いませんでした」 背後から聞こえた近江教諭の声が、ぞろっと鼓膜をなぞった。

なものでぐるぐる巻きになっている。

それがさらしだと気づくのには、さして時間はかからなかった。

秋のその胸は、確実に膨らんでいるのだ。

さらしで抑えこんでいるが、

のように、顎に飛んできた当て身にて意識を失う一端を担ってしまった。 後に想うことになる。この瞬間、停滞していた物語は動き出したのだと。 つられて振り向いたのが間違いだった。その動作はまるでカウンターへの布石であるか

53 1

補習を早く終わらせていれば、

真面目に勉強していれば、

クレープを食べに行ってい

n

有り体に言えば、

ここからすべてがはじまった。

れば、検収室の鍵が折れていなければ……なにも変わらずにやっていけた。ば、秋が風邪ひかなければ、冷蔵庫の回収を明日にまわしていれば、携帯を忘れてい 巻き戻すことのできないリアル。 しかし、そのすべての因果が織り込まれた、今ここにある現象は夢じゃない。 そんな秋をなだめ

54

ば、秋が風邪ひかなければ、

る近江教諭がいる、 生徒会室にて、椅! 椅子に縛られた俺と、かつてなく動揺している秋と、

「どどっ、どうする悠子っ! よりによ「どどっ、どうする悠子っ! よりによる。 「落ち着いてください秋ちゃん。起きてしまったことは仕方ありません」 よりによって家之助に見られたあああ!」

「そっちですか。……ああ、松尾が目を覚ましたようですよ」「勝負さらしじゃないの見られちゃったーっ!」 秋はびくっと身を震わせながら、 近江教諭は秋の視線をこちらへ促す。 恐る恐る俺を見る。

「見てない」 「い、家之助………見た?」

最後のあがきである。だって……肯定したら、 んだ見てないかーっ! よかったーっ!」 ひどく面倒なことになりそうだもの。

「だって家之助が見てないって言ってる!」 「秋ちゃん、素直すぎます秋ちゃん」 信じちゃうのかよ。

松尾は大物ではありません」 ここで、この場で最も冷静なのだろう近江教諭が仕切りはじめた。 ひどいこと言われた気がする。縛られている上にひどいこと言われた気がする。

「どう考えてもウソでしょう。身体を縛られた状態で起き抜けに冷静な返答ができるほど

ね? 「……はい」 「二人とも、まずは現実を受け止めましょう。まず松尾……あなたは見てしまいました 秋ちゃんの秘密を」

がっく

りと肩を落とす。 「秋ちゃんは、一ノ瀬秋は……変態なのです」近江教諭は小さく頷くと、ひとつの真実を口 「言い方っっ!」 秋の投げた消しゴムを、 おそらく近江教諭は騙せない。そう悟り、 近江教諭は平然と避けるのだった。 ひとつの真実を口にした。 俺は素直に頷いた。 それを見た秋は、

55 1

や……あまり冗談に聞こえないのですが……」

「冗談です」

```
56
伝えられないでしょう?」
                「落ち着いてください秋ちゃん。私が代わりに説明します。「ち、ちがっ!」これにはわけが……」
                  平静を失った状態ではうまく
```

男装をしてこの一二三高校に通っているのです」「生物学的、精神的、また戸籍上も、完全なる女性です。とある事情により、 「松尾、あなたが先ほど目にした通り……」ノ瀬秋は、女なのです」」を売まれる秋に、近江教諭はやれやれと溜め息をつくと、改めて告げる。「じゃあはじめからちゃんとやれやっ!」 九十九%理解していたことだが……いざ言われると、 またくるものがあるな 秋ちゃんは

しか言えません」 「……そういえば前に秋、ちょろっと言っていたよな。父親の実家は結構な名家だって。 「それに関して詳しく説明することはできません。 ただ、 『家庭の事情』ということだけ

「事情……?」

にこんなことさせるなんて、なにを考えているのだろうか。 そこが関わってくるのか?」 「そういった権力のある家なので、 尋ねると、秋は辛そうな表情でひとつ頷いた。どんな事情かは知らないけど……女の子 この高校でも事実をねじ曲げることができたのです。

中学までは女の子として生活していたのですけれど」 「そうだったのか……? そのわりには、うまく男子高校生としてやってこれたな……。

どんな仲なの………」 秋は近江教諭を一瞥する。教諭はそれに対し、家来のように頭を下げた。「訓練したからね……それに、悠子がうまくフォローしてくれたし」一番近くにいた俺でさえ、疑ったことすらないぞ……」 あと地味に衝撃なのが、 その関係性だよ。 なにその 『秋ちゃん』『悠子』 って。

見ているため、こちらとしては全然慣れない。 先ほどからあたかも普通のように会話しているが、普段は先生と生徒という関係として

いとこなのです」 「実は私も秋ちゃんの実家、 近江教諭は、その質問も想定済みとばかりにさらりと告げる。 一ノ瀬家の出身なのです。 具体的に言うと、 私は秋ちゃ

57 1 されたのです。たまたま高校の教員免許を持っていたので。 同じだったりするのです」 「え、ええー……」 「それで、秋ちゃんが男装をして学校に入学するということで、私がお目付役として任命そんな秘密まであったのか……完全に騙されていた身としては少し情けない。 実は住んでいるマンションも

```
58
                                                      顧問に任命されたのも同時期……言われてみればおかしくない。
 その瞬間から、秋との思い出がすべて、
                   俺は、見てしまったのだ。
                                                                       だがよく考えたら、
                  俺は、見てしまったのだ。秋が女である証拠を。しかし……ここにきてより一層困惑してきた。
                                                                                           驚きを通り越して、
                                                                                                             ……なんだそりゃ
                                                                         近江教諭がここに赴任したのは俺らの入学と同じ去年だし、
                                                                                           もはや呆れるしかなかった。
夢だったのではと感じてしまっていた。
```

にあったその時間は、虚構で埋め尽くされた幻だったのではないかと。 そう考えたら、なんだかひどく胸が苦しかった。

悪感に苛まれ、必死にそれを隠していたのだろうか。 「家之助………」」。。ただその感情は、どうやら俺だけのものではなかったようだ。ただその感情は、どうやら俺だけのものではなかったようだ。 「ご、ごめんなさい……騙してて……わたしっ……ごめん、なさい……っ」 仕方なくやっている男装のせいで、俺や月本や芽衣や、タもしかしたら秋は、ずっと苦しんでいたのかもしれない。 秋は、目に涙を一杯溜めながら、 ひねり出すような声で謝罪を述べ、秋は何度も頭を下げる。 震える声で話そうとする。 多くの人を騙しているという罪

「がんばったな」 そうなのだとしたら、俺が秋に……親友にしてやれることは、 ひとつだ。

の子であると、受容できていた。 「おまえだって、なにも悪くないだろ」 「そんな……家之助はなにも悪くないよ……」「もっと早く気づいてれば、おまえを苦しめずに済んだかもな。ごめん」 俺にはもう、 涙で濡れた顔を上げる秋を、俺はちゃんと見つめてやる。 目に見えるものはなにひとつ変わっていない。 秋は別の涙で瞳を潤ませる。 目の前にいる親友の顔をした人間が、 綺麗な顔をしたショ

「だって俺たちは、 「っ……うん……っ……うん……っ!」 親友なん……」

諭だけじゃなく、俺も頼れよ」

「よかったよ。秘密を知ったおかげで、

俺もおまえを助けてやれるな。

これからは近江教

だったら秋に見える俺の姿だって、変えずにいられるはずなんだ。

59

締めようとしたところで、 ークッションみたいな音が聞こえ

60

た。見ると、 「失礼しました。 松尾が椅子に縛られたままなにか感動的なセリフを口にしている姿が、教諭が平静な顔をしたまま口を手で覆っていた。ところで、あさっての方向からブーブークッションみたいな音が聞これ

あまりにも滑稽でブフォッ!」

「台無しだよっっ!」 絶対吹き出すタイミングじゃないだろ! なんて失礼な教師だこと!

「笑ってないで縄ほどいてください! なんで俺拘束されてるのっ?」

「秘密をバラさない、 そう言って近江教諭が取り出したのは、ガスバーナーであった。 と約束したら解放しようと思っていたのです。これで」

「間違えました。 「言うこと聞いてて本当よかった俺……っ!」 これは言うことを聞かなかったときの拷問用でした」

のところも燃焼しちゃう!」

「いやちょっと待って!

焼き切る気っっ?

それで縄を焼き切る気つっ?

やめてよ別

冗談です」

どこからがっ? そしてどこまでがっ?_

大胆な近江教諭の冗談。略して『大往生』です」 しゃらくせーっ!」



62

「もう、悠子は……すぐそうやって茶化すんだから」変だったけど……秋のいとこモードはさらに珍妙である。

秋の秘密を知ったせいで、芋づる式に近江教諭の変な一面も知ってしまった。

前々から

「すみません。シリアスな空気だったので、大往生で和ませようかと」

でも、はっきりしました。松尾、あなたを信用してもいいのですなこれまでの大往生、おおよそ殺伐として和めないんだよなあ……。

俺の言葉を聞き、秋はホッと胸を撫で下ろしていた。も言いふらすことの利点なんて、なんにもないです」

「つ?」

「すみません教諭、ガスバーナーはしまってください」

(スチャ

秋はいかにも予想外といった表情で驚く。そして近江教諭は:

「ただし……条件があります」

だが、

俺の言いたいことはまだ終わっていない。

「もちろん。もし秋が女だって知れたら、一二三高校全体が激震するでしょうし。そもそ

のために真剣なのだろう。

近江教諭はずいっと顔を近づけ、

蚊くらいなら殺せそうな眼光で俺を見る。 あなたを信用してもいいのですね?」

この

「でも、

63 1

にだって成り下がる。

一年前、そう決めたのだから。

笑われたっていい、

軽蔑されたっていいのだ。

ソレさえ手に入るなら、

俺はどんな人間

俺のこの『意思ある行動』が情けないと、笑いたければ笑うがいい。秋が女だと知って一通り驚いた頃、俺は幸運の種を握っていることに気づいた。

俺がほ

しい

のは、

人間

的完成などでなく、

たったひとつの恋なのだ。

俺と月本が結ばれるよう、

手助けをしてほしいんだ、

「ああ……秋、

おまえにお願いしたいんだ」

「条件って……家之助?」 大往生だと信じたい所存。

思考が危険すぎるだろこの人。

秋へ、

俺は強い

『意思』を持った視線を送る。